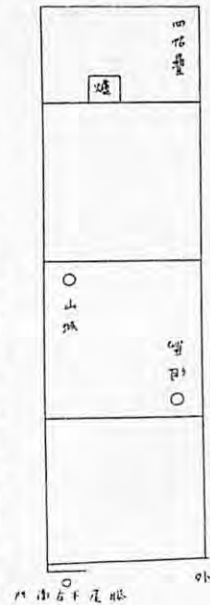


はらひ切り、先づ右の腕に當る。山城・半左衛門つゞけて切る。三太刀目に、首より齒まできり、切りとまる。利長様御出被成、幸五郎二郎せがれ雅樂助の刀にて、三太刀被遊山なり。半左衛門を利長様と心得たる跡と云ふ。



關屋政春古兵談には、御城の廣間にて、其の頃石垣の修繕被命、帳を持參但馬に見する。但馬座して片膝を立て、大脇指を差して、帳を披き一覽する處を、立ちながら拔打ちに眉間を切る云々。利長卿御長刀の鞘をはづし御出被成、主の目を闇まかし不屈なる奴と被仰、長刀の石突にて但馬を突かせ給へば、其時物はいはず、かぶりふりたりと聞き及ぶ也。とあり。右は慶長七年の事にて、此の頃は利長卿、右鶴丸の便殿に居給ひし事知られけり。おもふに、此の前

年慶長六年九月、世子利光卿の小君天徳夫人江戸より入興、本丸に新殿造營ありて、爰に居給へり。三壺記にも、江戸より姫君御興入らせらるとの上意に付きて、金澤御本丸に新造の屋形を建てさせ給ひ、その美々敷事、筆紙の及ぶ所にあらずと。されば此の時利長卿は鶴丸に別殿を建て、爰に居館し給ひたるものなるべし。さて其の地所は、聞見雜錄に、雷之御屏風の事、金澤城水、手の傍に利長卿御座之時、雷落御座右。則金屏に煙懸りて爲雲形。といふ事見れたれば、鶴丸水、手門の傍に便殿ありしと聞ゆ。右の御座右へ雷の落ちたるも、慶長七八年か、九十年頃の事なりしかど、記録に所見なきゆゑ詳かならず。能登國富木の大福寺に藏する利家卿の判書に、尾山のひろまへかみなり落ち、其そばに孫四郎居候て、少しひゞきにあたり候へども、何事なく候。と載せられたれど、是は文祿以前の事なるべし。又龜尾記に、加州野田桃雲寺に、太田但馬守殺害の時血のかゝりたる屏風を、其儘當寺に傳來す。とあり。此の屏風は慶長七年五月十四日、但馬守を殺害せし時座右にありしものにて、彼の雷火に爲雲形とある屏風とは異

なるべし。

### ○鶴丸人質小屋

古兵談殘囊集に云ふ。大坂寅卯の二役に、三ヶ國の一向坊主暨百姓・町人の頭立ちたる者共を、人質として鶴丸に小屋を作り入れ置かれ、奥村快心今枝宗仁を其奉行となし、晝夜三度宛來見し、其者共は各自賄にて居たりしと。此時質人たりし高岡の幽谷院主六十歳なりし頃、有澤永貞に語る。とあり。按ずるに、大坂寅卯の二役とは、慶長十九年十二月の冬陣と、元和元年五月の夏陣との兩軍役をいへり。十九年十二月廿日の日附にて、奥村伊豫守・三輪志摩守・横山夕庵三人連名にて、鹿島郡肝煎惣百姓中と宛所せし達書に、當御陣中在々所々長百姓等證人被召上に付て、從公儀二人扶持宛被下置候條、下々小百姓中與内申付候儀、有之間敷云々。とあり。右達書にて見れば、人質奉行は、奥村伊豫守に三輪志摩・横山夕庵と三人して奉行せしと聞ゆ。又賄方も、二人扶持宛賜はるとあれば、自賄といふは、自炊の事ならんか。小百姓中與内云々とある與内は餘荷の事也。三州志騷餘考に、慶長十九年十月

十四日公發軍、奥村快心永福を金澤の城代とす。十六日越前麻生津に宿陣、横山夕庵を召出し、復仕を許され、三萬石の故祿を賜ひ、留守を命じて金澤へ下し給ふ。とあり。右快心は伊豫守家福、夕庵は山城長知にて、兩人共に金澤留守職を命ぜられしゆゑ、人質の事をば奉行せしもの也。金城深秘錄に云ふ。松坂門右の方より同續の櫓を大將櫓と申候。平生は此名目は不申、敵の大將或は人質を入れ置かるゝ二重櫓なり。人の氣付かざる爲め、大將櫓と名付けたるもの歟。便所も櫓の内に有之、樋にて取り申す事。と見ゆ。人質の事なれば、饗應方も可有之により、人質は二階なり。下の重には圍爐裏も有之よし。是等は昔より其の例も有之べし。又云ふ。薪丸柵續に口有り。玉泉院丸よりの出入口なり。此所昔は人質廊の圖りに候哉。今はかくし廊のやうなり。といへり。平次按ずるに、大坂陣の時の加能越三州の人質は、坊主・百姓・町人共にて輕き者共なるゆゑ、鶴丸に小屋を建て、入れ置かれたるなるべし。是戰國の頃の名殘にて、大阪城攻の頃も、人質を取り、城内に置かれたるものなりと聞ゆ。